

# 美術

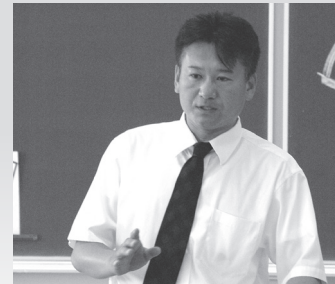
## 「想像」と「創造」の往還を通して、 見方や感じ方を深める授業

美術科の学習は「見る」行為から始まる。

対象を見ることから、直接自分の感覚を通して湧き出したイメージや印象を、造形の要素である色や形と関連付け表現します。

この、生徒自身が芸術的価値として意味付ける過程こそが、深い学びにいたる授業のための指導プロセスです。

また、深い学びにいたる授業をつくる力は、授業を見る目から生まれます。



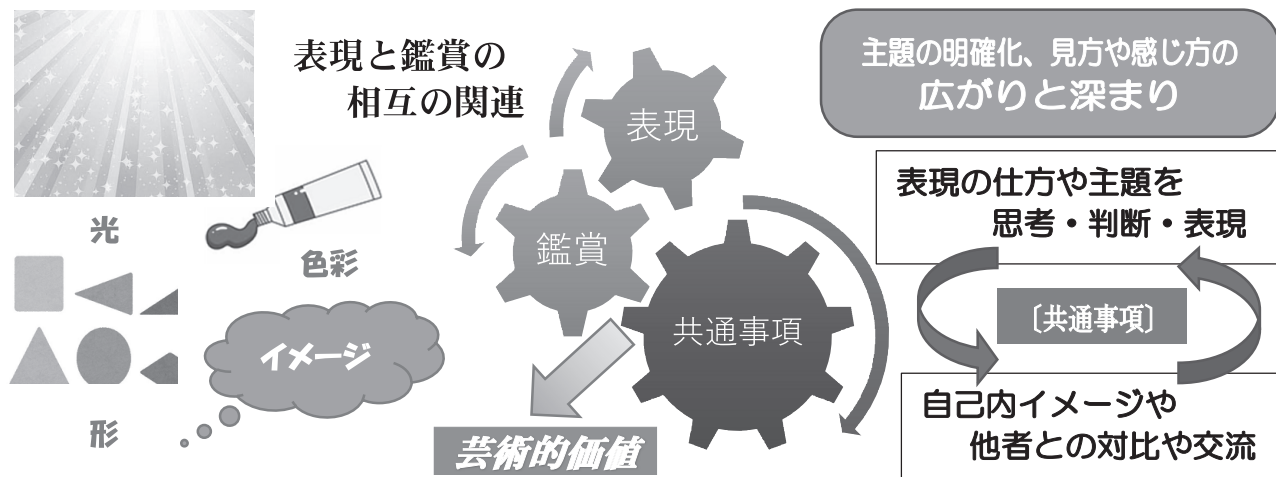
県中教研 美術部 全県部長  
阿賀町立阿賀津川中学校

校長 稲生 一徳

### 見方や感じ方を深める 表現と鑑賞の相互の学習

生徒は、作品が完成した時に、成就感や達成感を得ます。より大きな成就感や達成感を得るためには、表現と鑑賞との関連を図ることが重要です。なぜならば、作品を鑑賞し、作者の心情や表現意図について考えることは、表現する際に主題を生み出す力になるからです。また、表現を通して主題を生み出した学習経験が、鑑賞では作者の心情や意図を感じ取る力を深めることにつながるからです。

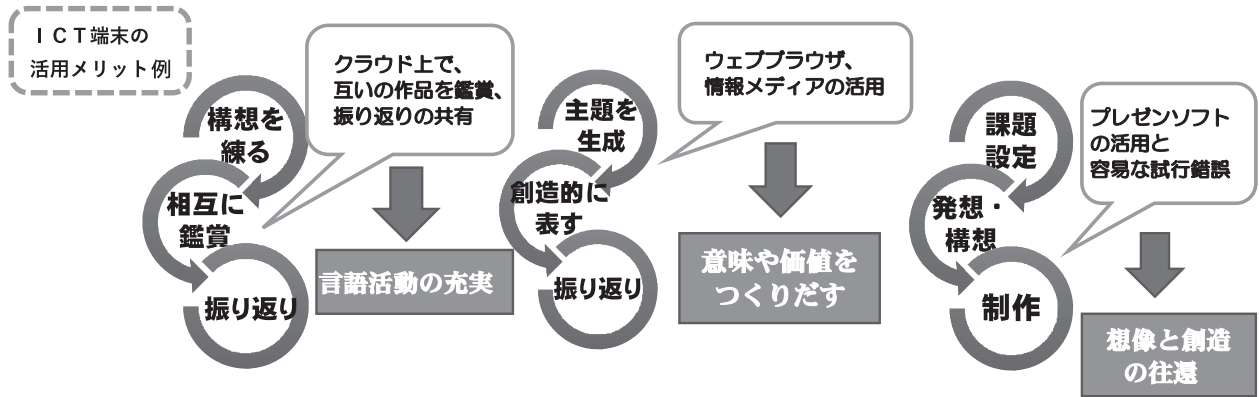
岡地先生（長岡東中）の授業では、自分らしい表現を追求させるために「自画像」の制作に取り組みます。その指導過程の導入に、美術作家の自画像の鑑賞を位置付けます。作家の心情や制作意図、表現の工夫などを読み取らせませす。作者の作品に込めた様々な思いや主題を深く考えさせることは、生徒が自己の内面を見つめ直し主題を生み出すきっかけや、自分の表したいものを強化したりすることにつながります。



## 深い学びを支える「効果的なICTの活用」

長岡市中教研では、ICT(ク롬ブック)を道具として、学習のねらいに応じた効果的な活用について研修を進めている。ICTの活用

により、目(視覚)と手(触覚)と頭(思考)との一体化を図ることを通して、生徒自身の基点を実感し、友人とのつながりも拡張します。



## 見方や感じ方を深める 対話型鑑賞

美術科の学習の特性として、意図的に仕組まれたものではなく、活動に付随した偶発的な学び(セレンディピティ)が生まれます。これは、他教科にはない美術科ならではの楽しさでもあります。

杉崎先生(村上東中)の授業で注目したいのは、作品を感じ取ったことや考えたことを第三者(友人)にも理解できるように言葉で表現したり、造形の要素にかかわる知識を活用したりしながら交流をさせます。授業者が生徒の言葉を繋ぐことにより、気付かなかった新たな視点や概念などを獲得し、作品に対する新たな価値をつくり出していきます。

村上・岩船中教研では、県立近代美術館の学芸員を講師とした研修や授業研究を通して、研鑽を積んでいます。また、感受したことを自分の言葉で語り、感じ方の違いや価値観の多様性を共感的に理解できる生徒を育てています。



「森」を見る視点  
(実物大の作品を座視)

造形を豊かに捉える



「木」を見る視点  
(細部を拡大し見る)

## 美術 重点目標

「美術を通して、豊かな生き方やコミュニケーションができる生徒の育成」  
○形や色彩など造形的な美しさを表現したり、鑑賞したりする授業を通して、お互いの見方や感じ方を認め合う生徒を育てる。

# 美術 <中越地区・長岡市中教研>

## 「自画像」

研究主題：ICTを利用した主体的な表現活動の工夫

開催日：11月10日（木）

会場校：長岡市立東中学校

公開：1学級

授業者：3年 岡地 大輔

指導者：阿賀町立阿賀津川中学校 校長 稲生 一徳 様

新潟県教育庁義務教育課

副参事・指導第二係長 清水 康一 様



研究推進責任者  
長岡市立大島中学校

竹田 祉薫



会場校教科担当者  
長岡市立東中学校

岡地 大輔

### こんな深い学びの姿を目指します

- 題材について、自分なりの意味や価値を探しながら、自分の思いを確かにしている姿。
- 自分で決めた主題に対し、構想を練り上げ、創り出す喜びを感じながら、試行・探求し続ける姿。
- 自他の作品からよさや美しさを感じ取り、互いの感性や表現の多様性を認め合いながら、考えを深める姿。

### 深い学びにいたるポイント

#### ポイント1 学習意欲を掻き立てる

ジャムボードの付箋機能を使用し、班員と共有しながら意見を打ち込むことで、正解を気にせず主体的に取り組めます。

#### ポイント2 豊かな構想を引き出す

オクリンク\*のカード機能を活用して作品の構想を練りまです。文字だけでなく画像も取り入れ、視覚情報として自分の頭の中にある考えを整理し、カードを組み替えながら、より明確にイメージし易くなります。

#### ポイント3

#### 共感的態度の育成

ムーブノート\*を使用して、効率良く意見を集約します。自他の考え方や感じ方の違いを捉え、新たな自分の見方や考え方を広げます。

#### 伝える力の育成

意見交流しながら鑑賞することで、色や形などがもつ特徴や、イメージを生かして表現することの価値を話し合うことで、自分が制作する自画像への思いや考えをまとめ、深めていきます。

#### 授業前後のアンケートで確認

題材の様々な場面で、意識して取り入れたICTの利用が、深い学びに繋がっているのかを確認します。授業前後にFormsでアンケートを実施し、効果や改善点を検討します。

\*学習用ソフト（ミライシード内の機能） ムーブノート…協働学習支援アプリ、オクリンク…授業支援アプリ

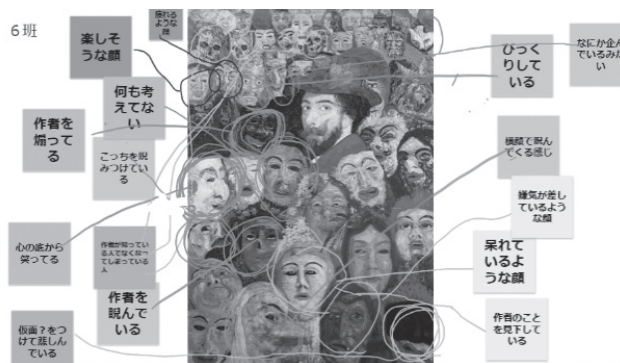


## 題材の様子

### ポイント1

#### 自画像鑑賞「アンソール」

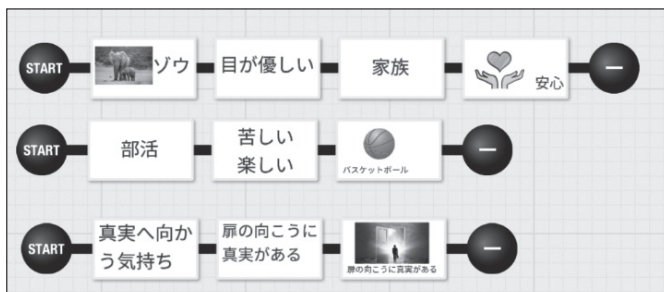
タブレットを使って「仮面に囲まれた自画像」を班で鑑賞します。描かれている一つ一つの顔を拡大しながら、読み取れた表情や想像した感情などを打ち込み、顔で囲まれた主人公はどんな気持ちなのかを想像します。



### ポイント2

#### 構想を練る

オクリンクで自分がイメージするキーワードをカードにし、そこから連想した言葉を繋げてイメージマップを作成します。インターネットから画像を引用し、視覚情報として分かりやすくまとめます。一旦できあがったイメージマップをスライド形式で仲間と共有して客観視します。その後、再び個人活動に戻り、カードを追加したり入れ替えたりしながら、自己表現を追求するために構想を深めます。



## 研究会

### ポイント3

題材の中にICTを効果的に取り入れることで、生徒が主体的に取り組みながら自己表現でき、より深い学びに繋がるだろうと研究を進めてきました。

研究会当日は2部構成で開催します。第1部は、有名作家の自画像を導入部分で鑑賞する公開授業を予定しています。時代の違う作品や描かれた年代によって表現が違う作品を鑑賞することで、自画像とは自分の気持ちや考え、人生そのものを絵で表現しているという本質を知り、生徒一人一人が自分にとって自画像を描く意味を考えていきます。

第2部は、研究推進委員6名、それぞれが様々な題材におけるタブレットの活用場面を、プレゼンテーションボードを使って発表します。長岡市中教研美術部員へのアンケートでは、クロムブックを使用した何らかの効果が感じられているものの、まだどの学校も授業実践が少ないため、使い方や活用方法が分からない、環境が整っていないなどの言葉が寄せられています。私たちが実践し研究してきた内容が、これからの授業づくりのヒントになればと思います。



# 美術 <下越地区・村上市岩船郡中教研>

## 「鑑賞」

研究主題：主体的に美術と関わり、美術作品の自分なりの見方や感じ方を深める指導の工夫  
～対話型鑑賞の実践を通して～

開催日：11月11日（金）

会場校：村上市立村上東中学校

公開：2年2組

授業者：2年 杉崎 浩子

指導者：下越教育事務所 学校支援第2課 指導主事 磯部 睦 様  
胎内市立中条中学校 校長 丹後 直子 様



研究推進責任者  
村上市立村上第一中学校  
野原 千絵



会場校教科担当者  
村上市立村上東中学校  
杉崎 浩子

### こんな深い学びの姿を目指します

- 対象を形、色彩、筆勢といった造形の要素や構図など、複数の観点から観察し、想像力や感性を働かせながら、そこから受ける印象を自分の言葉で表現し、対話を通して、他者の視点や考え方、感じ方に気づき、対象を新たな見方で捉える姿。
- 対話型鑑賞の活動を通して、作者の表現意図と、表現方法や視覚効果との関わり等に気づき、他の作品の鑑賞や、自分の作品制作にも生かしていける抽象的な概念を獲得する姿。

### 深い学びにいたるポイント

#### ポイント1 自己との対話

形や色彩などの造形の要素をもとに考えさせることで、作品が訴えてくるものをじっくり読み解きます。そして自分の言葉で考え整理します。

#### ポイント3 深める問い

自分なりの解釈を深める問いを提示します。そうすることが、他の作品を鑑賞する際にも汎用する抽象的な概念の獲得になると考えます。

#### ポイント2 対話型鑑賞

対話型鑑賞は、作品を見る人同士の対話を通して作品の理解を深め、鑑賞者が作品のよさや美しさ等を実感し、価値を作り出す鑑賞です。

対話型鑑賞を通して他者と解釈の交流をすることにより、自分とは違う見方や感じ方と出会うことで自分一人では気付かなかった価値などに気づき、視野が広がります。また、他者を受け入れるとともに自分を受け入れてもらうことで自己有用感も高まります。さらに、想像力の育成につながることを期待されます。最終的には自分の見方、感じ方に自信をもって人に何を言われても「これだ！」と表現できる生徒の姿が期待できます。



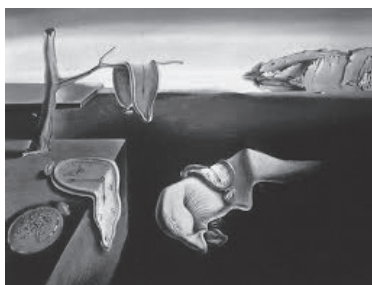
## 単元(題材)の様子

### ポイント1

#### 自己との対話

これまでのプレ授業では『最後の晩餐』『記憶の固執』『イギリスの見納め』など、様々な作品を教材にして鑑賞の授業をし、作品の見方を学習してきました。

当日は①造形の要素(形・色・筆勢など)を意識的に捉えて見る②絵の中に入り込んで五感を働かせて見る③「この作品で、どんな出来事が起きていると思う？」(自分なりの想像)⇔「作品のどこからそう思いましたか？」(根拠)という見方を提示します。それに沿って個人で絵を見て自分の考えを書いていきます。



### ポイント2

#### 対話型鑑賞

グループになり、それぞれが考えたことや感じたことを順番に伝え合い、聞き合います。生活経験は人それぞれで、出てくる解釈も多様です。

出された解釈に対して、ファシリテーターが「どこからそう思う？」と問い、解釈を深めていきます。このとき他者の解釈を否定せずに聞くことが大切です。最後にファシリテーターとライターが中心になり、出てきた解釈を分類し、提示された問いに向かって集約していきます。



### 研究会

### ポイント3

#### 深める問い

今年度の研究会では、昨年度の課題として、①対話が弾み、深まるような作品選び②臨場感のある作品提示③効果的なICTの使い方④対話型鑑賞の展開⑤振り返り、まとめの仕方⑥発言や語り合いの交流活動の経験の6点があげられ、議論と実践を重ねてきました。

その中でも特に、④の「深める問い」とは、どのような問いなのかが課題となりました。本時では岡本太郎の『森の掟』を鑑賞します。様々な視点から様々な解釈が出てくると予想されますが、この鑑賞活動を通して「絵の印象はどこで決まると思うか」という問いを投げかけます。この問いを考え対話することで、他の作品を見る際や、自分自身の作品制作にも生かしていける抽象的な概念を獲得できると考えます。

